

1 2年間で行った業務

- (1) 春日市教育委員会との連携により、以下のことを実施した。
- 福岡教育大学の学生12名を春日市内の小学校12校へ派遣した。
 - 春日市が2005年に作成した「英語活動基底カリキュラム」を実施し、内容を検討した。
 - 春日市の「英語活動基底カリキュラム」の改定を2008年度以降の実施に向けて実行することを決定した。
 - 春日市の小学校教員を対象とした教員研修プログラムを2006年に4回実施した。
 - 春日市の英語活動に向けて、学生ボランティアも参加する教材作成ワークショップを2006年に2回実施した。
 - 今後の連携協力の体制を強化した。
- (2) 久留米市教育委員会国際理解教育班の研究に立ちあい、以下のことを実施した。
- 検証授業全12回の助言を行った。
 - 検証授業全8回の授業参観と研究会に参加した。
 - 今後の連携協力の体制を作った。
- (3) 校内で学生向けの小学校英語勉強会を全10回行った。
- (4) 研究論文・書籍を取り寄せ、内容を吟味・調査した。

これらの活動からわかったことを以下の「2 プロジェクトの成果」で述べ、それを受けて今後どのような活動を行ってゆくかを、「3 今後の活動」で述べる。

2 プロジェクトの成果

小学校英語活動のプロジェクトは、本学に専門家がいなかったことや、学問としてまだしっかりと確立していないこと、どのような機関に協力を求めていけばよいかかわからなかったことなどから、手探りの状態で進んでいった。しかしながら2年間の成果は、単にこのプロジェクトの成果にとどまらず、今後も小学校英語の研究・教育活動を進めていくためのインフラストラクチャーを確立させていったことにあるといえる。

この報告書では、2年間の研究で小学校英語活動を進めていく上でわかったことや確立していったインフラストラクチャー上の成果を述べていく。具体的には、

- (1) 英語活動の中身 (2. 1)
- (2) 教員に対する必要な援助 (2. 2)
- (3) 学生に対する支援 (2. 3)

を述べる。

この報告書で伝えていることは、正式な調査を行った上での数値上の結論ではない。あくまでもプロジェクト代表者の観察と、プロジェクト代表者が関わった教員から得た情報とが中心になったものである。しかしながら、実際に直接指導に関わる教員や、現場を体験した者による意見は非常に的を射ていることが多い。

また、単なる数字による検証は、傾向を示すことはあっても、細かい数値によってしか表されない重要な事実を見逃しがちである。例えば、80%の児童が英語好きである、というデータは「児

「児童は英語が好きである」という主張をサポートするために良く用いる。それは間違いではないが、20%が好きではないという事実を見逃しがちである。全ての児童に等しく英語活動を体験してもらうことが大切な小学校教育においては、残りの20%の児童に対してどのような教育を行ってゆくか、ということも大きな課題である。授業者や観察者の主観というものは、このような少数の児童の振る舞いを見逃さないものである。

とはいえ、主観だけで第三者を説得することは難しい。今後は、倫理的な問題をクリアしながらより正確で細かい情報を見逃さないような調査方法を開発してゆく必要は確かにある。

2. 1 英語活動の中身——「スキル中心」ではなく「コミュニケーション重視」の活動を。

(1) 「スキル中心」対「コミュニケーション重視」のディベート

中央教育審議会外国語専門部会が2006年3月に発表した報告によると、現時点で行われている小学校英語活動は大きく分けて2種類のものがある。一つは、英会話などの能力を伸ばすための「スキル中心」の活動である。もう一つは、「コミュニケーション重視」の活動とよばれているものである。後者においては、英語を用いて言語や文化に対する理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、国際理解を深め、国際コミュニケーションをより重視するのが第一の目的である。

具体的にスキル中心の授業とコミュニケーション重視の授業はどのように違うのかを整理してみると、次のような特徴に整理できる。

スキル中心

- 先生のあとをつけてリピートする。
- 発音が「間違っ」いたらすぐに矯正される。
- レストランや店などでの英会話をシミュレーションする。
- 授業内での日本語の使用が禁止される。
- 新しい語彙を何度も繰り返させて覚えさせる。
- 細かい文法的な間違いが指摘される。I like apple は間違いで、I like apples とすべき、など。
- ターゲットとなる語彙や文型が指示される。例えば「天気と言えるかな」など。
- 「話すこと」が中心である。
- 「盛り上がっている」かどうかで授業が評価される。

コミュニケーション重視

- 先生の英語を聞いてわかる範囲で理解する。例えばALTが週末に行ったパーティのことを説明しているが、聞きとれたことやわかったことなどを児童同士で話し合うなど。
- 自分の言いたいことを、言える範囲内で英語で表現する。日本語の使用も許可される。
- 単なる「旅行英会話」ではなく、自分の趣味や他人の家族構成など、人同士のコミュニケーションが意味を持つ状況が設定される。
- 特にターゲットとなる語彙や文型が提示されるのではなく、英語を使ってどのようなコミュニケーションを行うのが指示される。例えば「友達の家族について聞いてみよう」や「自分の家の鍋料理を紹介しよう」など。
- リッスン・アンド・リピートは行わない。
- 発音の矯正は行わない。
- 文法的な間違いを指摘せずに、自由に自分の意見を言うことが奨励される。
- 「聞くこと」が中心である。必ずしもワイワイガヤガヤ盛り上がってなくても、こどもの頭の中で起こっていることに重点が置かれる。

2年間のプロジェクトを通して「スキル中心」の活動と「コミュニケーション重視」の活動では次のような長所・短所があることがわかった。

	長所	短所
スキル中心	<ul style="list-style-type: none"> ○英語を「覚える」のに効果的である ○中学校での英語において有利に働くことがある。 ○教師の準備が楽である。また、小学校教育に精通しないゲストティーチャーやALTに授業を100%任せることが可能である。 ○評価が楽である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○小学校において既に英語が嫌いという児童を増やす ○担任が授業をしない場合、授業後に担任の疑問が残る。(このような活動をしていてよいのか、など) ○簡単に教材業者が小学校教育をコントロールすることができてしまう。 ○評価は楽だが、正しい評価となっているかは疑問である。
コミュニケーション重視	<ul style="list-style-type: none"> ○自分のことを伝えたい、他人のことを知りたい、と思う気持ちがはぐくまれる。 ○そのために相手の英語をなんとか理解しよう、やなんとか自分の言いたいことを伝えようとする気持ちが高くなる。 ○英語嫌いを増やさない。 ○評価は難しいが、全てのこどもに対して良い点が見いだされる評価を行うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○楽しくなければ英語ではないという印象が付きやすく、中学校以降の「学習」を受け付けにくくなる。 ○準備に時間がかかる。 ○教師が児童一人一人のニーズを理解しておく必要がある。 ○必ずしも外に出ないところでの学習が重要であるので、評価が難しい。

このプロジェクトでは「スキル中心」ではなく「コミュニケーション重視」の活動が、次の理由で小学校英語に適していると判断した。

- | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 担任がコントロールしやすい (2) コミュニケーションが自然である (3) トップダウン処理中心の活動をして、中・高の連携を促すことができる (4) 児童一人一人を尊重することができる |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

(1) 担任がコントロールしやすい

この比較でもわかるように、「スキル中心」では小学校の教員は必要ではない。むしろ小学校教員が関わるためには、相当な研修を要する。

これに対して「コミュニケーション重視」では、まず担任の児童一人一人を理解しているという能力がものを言うようになる。児童のニーズに合わせて、必要なコミュニケーション能力を選択しなければならないからである。

(2) コミュニケーションが自然である

「スキル中心」では、ある一定の語彙や文型を覚えることには適しているが、それを使ってコミュニケーションをさせようとしても無理が生じる。例えば自分の知らない言葉がコミュニケーションに出てきたら対応できない。したがって、教室内で行うコミュニケーション状況の設定が不自然になる。例えば天気の場合をとると、**What's the weather today?**と相手に聞く活動が出てくるが、その日の天気を尋ねること自体、日常会話ではあまり行われぬ。実際にそれに対して **It's fine.** などという答えをすることにとまどいを覚える学習者は多いはずである。

これに対して「コミュニケーション重視」では、自然なコミュニケーションとなるかどうかが大きな問題である。従って天気を取り込む授業では、今日の天気ではなく、明日の天気を聞かせる活動にしよう、などの判断が重要となる。その際に **What's the weather tomorrow? It's rainy**

tomorrow. というやりとりは正確ではないのだが、より意味のある状況を設定していることになる。

(3) トップダウン処理中心の活動をして、中・高の連携を促すことができる

「スキル中心」は言語の「ボトムアップ処理」を強化するものである。「ボトムアップ処理」とは、言語の細かい単位を一つ一つ理解した上で全体を理解する、という情報処理を言う。現在の中学校・高等学校ではこのボトムアップ処理を向上させる活動が大半を占めるが、これだけではコミュニケーションを有効におこなうことは出来ない。なぜなら、わからない単語が出てくるたびにコミュニケーションが止まってしまうからである。聞き取りが苦手だったり、多少難しい英文を処理できないのは、トップダウン処理が苦手だからである。

これに対して「コミュニケーション重視」ではいわゆる「トップダウン処理」（発話の全体を捉えることから細かい単語や文型を理解しようとする情報処理）を奨励する。細かい文法や発音にとらわれずに、例えば ALT が何を言っているかを聞き取らせることから入るので、児童は「今テキーラって言わなかった？」とか「バースデープレゼントって言ってたから、誕生日の話じゃないか」などと、わからないことがあっても全体の趣旨を聞き取ろうとする。大学生の英語を教えていてもトップダウン処理が足りないために、聞き取りが出来なかったり長めの英文を読み取ったりすることが苦手なのは明確であるのだが、それはやはりこれまででそのような処理法による理解が推奨されていないからであろう。中学校・高等学校の英語教育を今変えるのは非常に困難であるが、新しく小学校で導入でき、かつ中・高へ連携できるとしたら、このトップダウン処理による理解ではないかと思われる。

(4) 児童一人一人を尊重することができる

英語を身につけるといふことは、ある意味別の性格を強要されるということでもある。例えば声を大きく出して発音しましょう、などという指示がだされるが、大きな声で発音することが自分の性格上難しい子どももいる。大きな声を出さなければ出すまで何度も言わせられる、という「スキル中心」の教育では、恥ずかしがりの子どもに対してマイナスの評価しか与えられない。そのような子どもに発音を強要する「スキル中心」で英語嫌いを出さない方が難しいといえる。

これに対して「コミュニケーション重視」ではあくまでも児童一人一人の性格を重要視する活動が展開できる。それは授業が「盛り上がる」かどうかは重要ではないからである。子どもたちが積極的に英語を使って活動していることが大きな意味を持つ「スキル中心」と異なり、「コミュニケーション重視」では、子どもが頭の中で考えを巡らせることが重要である。例えば ALT の英語を聞いて一生懸命理解しようとする様子が大切である。従って、例えばドリーム・キャッチャーの作り方を ALT から一生懸命聞いて、そのあと友達と相談しながら実際にそれを作るという活動で重要なことはドリーム・キャッチャーができたかどうかであり、たくさん英語を喋ったかどうかではない。

(2) 「コミュニケーション重視」の活動での注意点

国際理解を中心に添えるコミュニケーション重視でも、注意をしなければならない点がある。

- | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 英語圏のみの文化紹介にとどまらないようにする(2) 評価の体制を整える |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------|

(1) 英語圏のみの文化紹介にとどまらないようにする

なにかと英語圏の文化のみが紹介されることがまず挙げられる。例えばクリスマス、ハロウィン、バレンタインデーなどである。しかしこれではまず、英語圏の文化がもっとも優れた文化であるというような考え方に結びついてしまう懸念がある。例えばクリスマスはキリスト教に特有の文化であり、同じ時期に「ハヌカ」という祭りを行うユダヤ教なども同様に取り扱い、国際理解の観点を取り入れる必要がある。

(2) 評価の体制を整える

「スキル中心」とちがって、特定の単語を覚えているかどうか、天気の見方を知っているかどうかなどが教育目標ではない。相手の話を聞く態度があるかどうか、や国際理解ができているかどうか、など一見曖昧な観点で、測定も難しいものが多い。今のところは「総合的な学習の時間」の中での活動であるので、軽視されがちな側面ではあるが、小学校で行っている以上は、学校として社会に対する説明責任を果たすためには「コミュニケーション重視」の英語活動で児童が進歩したことなどについてはしっかりと示さなければならない。また教科化された場合に備えても、その場で泥縄式で作るのではなく、じっくりと時間をかけて良い方策を探っていく必要はある。

2. 2 教員に対する必要な援助

これまで英語を勉強しなかった小学校教員が急に英語の時間を担当させられることになるのは、心理的にも物理的にも大きなプレッシャーである。2年間のプロジェクトを通して英語活動を行うに当たって教員が不安に感じていることは次の通りであることがわかった。

- (1) 自分に英語力がない。英語に自信がない
- (2) ALT や GT とうまくコミュニケーションができない
- (3) 英語活動をするといっても、指導要領のようなものもないので、何をやればよいかわからない
- (4) 教材を作成する時間がない
- (5) 研修に参加する時間がない

(1) 自分に英語力がない。英語に自信がない。

この範疇に属する教員は春日市においては9割以上である。しかしながら、「コミュニケーション重視」の英語活動において、小学校教員が児童に対して示すべきなのは、いかに教員に高い英語力があるかではない。むしろ、模範的な英語学習者であることを示すことが重要である。教師は、「先生も英語はよくわからないから一緒に勉強しよう」という態度を示さなければならない。その態度を見た児童は、「先生のようにコミュニケーションをとればいいんだな」「わからないときは先生のような見方をすればいいんだな」「先生はあんな風に相づちをつけているな」「先生はどんな風に英語を勉強してるのかな」「あんな風に聞いていれば話が弾むな」などについて答えが見いだせるようになるはずである。

従って小学校教員に求められるのは、中学校や高等学校教員に求められるような英語力ではない。逆に、英語力がないとダメだという認識は、英会話学校の教師、地域ボランティアや英会話教材業者への過度の依存を導いてしまう。実際に担任の希望を無視して自分の信条通りの授業を行う GT は多い。学校の教育目標がまず前提としてあり、それに沿った英語活動をやっていかなければならないはずなのに、担任がコントロールできない英語活動が実際は存在しているのが現状である。

各学校でこのことを理解している教員は少ない。このようなことを理解している教員が、そうでない教員に伝えることの難しさも報告されている。「私たちが説明しても聞いてもらえない」という意見は多い。この意見は、ぜひ大学や教育委員会からそのような説明を各教員にしてもらいたいというニーズがセットになって提示される。

(2) ALT や GT とうまくコミュニケーションができない

この範疇には2つの原因が存在する。一つは外国人の ALT や GT の場合、英語力がない自分がどのように授業計画を相談すればよいかわからない、という点である。この点は実は小学校英語教員に限ったことではなく、中学校・高等学校でも ALT と日本人教員とのコミュニケーション不足は存在する。もう一つは、英語活動をどのように行えばよいかわからないので、反対意見を持つ

ALT や GT に反論することができないという点である。

英語力不足については、授業ができないことという（１）の問題とは別なところにも波及するようである。小学校で雇う ALT や GT に対しても、何らかの研修を実施する必要があると思われる。久留米市では ALT との関係が非常によかったが、このケースでは ALT がある程度の日本語を理解するという点もプラスに働いたかもしれない。しかし ALT や GT の質によって英語活動が左右されてしまうのではやはり困るのであり、担任や英語担当教師がある程度コントロールできるようにするための研修等が必要となるであろう。

ALT や GT をコントロールする、ということは、盲目的に自分の主張をもとに彼らを従わせることとは違う。建設的な意見やアイデアには耳を傾けることのできる寛大さや余裕もなければならない。

（３）英語活動をするといっても、指導要領のようなものもないので、何をやればよいかわからない

この点について、春日市の場合は「基底カリキュラム」があるので、困ることはないようである。しかしそのようなカリキュラムが用意されていない学校の場合は何を扱えばよいのか、に相当な労力を必要とするのが現状である。結果として、既にできあがっている業者の教材を用いることとなる。実際春日市では「基底カリキュラム」があるにもかかわらず、業者の教材を用いている所はある。業者の教材をひとくりに良くないと批判するつもりはないのであるが、一般的な教材であればあるほど、児童のニーズに応えにくくなるし、なにより「スキル中心」の内容になってしまう危険はぬぐえないのである。

学校や教育委員会が明確な教育目標を掲げて、それに沿った英語活動を行っていかなければ、社会的説明は果たせない。「スキル中心」では、例えば小学校終了時まで英検 3 級を持っている、などの目標が掲げられることが多いが、果たして小学校英語がそれを達成しなければならないかどうかは大きな疑問である。しかし「コミュニケーション重視」では目指すものがより曖昧になってくる。なおさらしっかりとした教育目標を設定する必要がある、保護者や社会に対する説明責任を果たさなければならない。春日市においては「基底カリキュラム」が 2005 年にできた当初は明確な目標がなかったが、今回の改定では「コミュニケーション重視」のもと、新たに教育目標を設定することとなった。

（４）教材を作成する時間がない

この問題は実に深刻である。教師には時間がないという究極の問題をクリアしなければならないからである。

今回のプロジェクトでは教材を購入してこの問題に対処しようとしたが、２つの点でうまくいかなかった。１つは英語活動のニーズに合わなかったと言うこと、もう一つは大学に教材があっても使い勝手が悪かったということで、もっと身近なところになれば使われない、ということであった。既製品の教材は、コミュニケーション重視の授業では、いまひとつ相容れない所があるようで、実際に教師が必要だと感じたものを手際よく用意するシステムを構築する必要がある。これらの教材はできれば地元の教育委員会に、あわよくば各学校に置いておき、使い勝手を良くする工夫も必要である。

もう一つ今回のプロジェクトで対応したのは、夏休みを用いて、学生ボランティアも動員した上で２回教材作成のワークショップを行ったということである。ここでは教員が２学期以降に実施する英語活動に用いるものを、オン・デマンドで作成したので好評であった。学生の手伝いがあったために、作成もスムーズに進んだのである。しかしながら問題は、この日程を２回設定するのに非常に困難を来したことであった。

（５）研修に参加する時間がない

以上の４点をクリアしていくためには、何らかの教員研修が必要となる。しかし現在の小学校の先生はこの時間がない。既に英語以外の教科や領域の研修もある上に、更に英語だけの研修というのが重なると、非常に参加が難しくなるのである。今回何回か研修を行ったとき、また行おうとしたときに生じた問題は、研修をやってももらえるのはありがたいが、それに参加する教員がいない、

ということであった。校長公認の研修には行きやすいが、そうでないものについては時間外に行くしかない、ということである。時間外に研修を行ってもそれに参加するのは実は英語が十分使える教員であったり、英語活動についての造形が深い教員であったりして、むしろそうでない教員に来て欲しいという実施側の思惑は達成されない。

京都府の教育委員会では、教育センターの職員が毎日のように各学校に出向いて授業計画の補助をしている。また、福岡市の教育センターでは、メンター制度を取り入れ、やはり教育センターの職員が各学校に出向いて年間100日に及ぶ指導に当たった。本学でこのような制度を実施するのは難しいが、教育委員会と連携をもっと深くとることによってできることがあるのではないだろうかと考えている所である。

2. 3 学生に対する支援

本プロジェクトの2年目には春日市内の小学校に学生を派遣するという業務を行った。その成果として、次のようなことが明らかになった。

- (1) 小学校側からは「英語のできる学生」が求められる
- (2) 学生側は小学校自体に興味のある学生が応募してきやすく、必ずしも「英語ができる」とは限らない
- (3) 学生に対する研修は困難である

(1) 小学校側からは「英語のできる学生」が求められる

春日市教育委員会では、あくまでも派遣学生は「授業補助」である、というスタンスであったが、実際に利用する学校では、「丸投げ」の形をとられた場合もあり、学生の負担が大きかったケースも見られた。もっとも学生自身の勉強にはなったとは思われるが、これにプレッシャーを感じる学生も多く、引き続きボランティアをやりたいという学生は多くなかった。

学生の中には英語ができるものもいたが、実際に授業を参観すると、小学生にはあまりにも難しすぎる英語を使って授業をするなど、研修の必要性を感じた。

(2) 学生側は小学校自体に興味のある学生が応募してきやすく、必ずしも「英語ができる」とは限らない

応募してくる学生は、小学校の免許を取ろうとする学生である。中英の学生でも小学校の免許を取ろうとする学生が2006年度はたまたま多く、何人かは参加することができた。しかし、中英の学生が小学校の免許を取ろうとすると、とらないと行けない授業が多く、ボランティアに参加する時間がないというケースが普通である。

中英でない学生の場合、やはり英語力に自信がない学生が多く、教員側のニーズになかなか応えられないのが現状である。

(3) 学生に対する研修は困難である

小学校で英語活動を行える自信が付くほどの英語力を養うための研修を行ってきたが、研究代表者だけではこの研修は難しい。例えば水曜日の6時間目に設定して行っても、補講やその他のボランティア活動などで人数がそろわずに断念した活動は多い。小学校英語のための授業を考える必要があるかもしれない。なお、2007年度開始のカリキュラムでは2年次に選択して履修できる「プラクティカル・イングリッシュ」で小学校英語のための授業を組み込むこととなっている。しかし、実際には一般英語でつける英語の能力と、小学校英語のための英語の能力は別に考える必要がある。

3 今後の活動

上記のような成果を踏まえて、今後の活動として取り組む点を上げていく。2年間のプロジェクトにより、春日市や久留米市の教育委員会を中心に、様々な機関との連絡を密に行ってきたし、いろいろな学校や人材との出会いがあった。これをもとに、以下の調査や研究を引き続き行うことが

できる。

- (1) 春日市と引き続き小学校英語活動について連携協力を行う
- (2) 久留米市と引き続き小学校英語活動について研究を重ねる
- (3) 宗像市内の小学校と連携・協力の可能性を探る
- (4) 春日市との実践研究の成果を 2008 年度中の学会で発表する
- (5) 教員が参加しやすい研修を立案・実施する
- (6) 教材作成請負業務の可能性を探る
- (7) 教科化にむけて、評価の方法を探る

- (1) 春日市と引き続き小学校英語活動について連携協力を行う

特に春日市とは、「基底カリキュラム」の改定を引き続き行ってゆくことで合意が取れている。今後はこの改定を行いながら、どのような教育目標・方法が良いのかについて、研究を行っていききたい。

特に小学校において、調査の際には様々な倫理的問題をクリアする必要がある。例えばAという教授法の利点を証明したい際に、あるグループ（実験群）にはAを用いるが、その効果を検証するためには、Aを用いないグループ（統制群）を設定しなければならない。その実験期間中は、統制群はAの恩恵を受けられない。小学校は全て等しく教育を受ける権利があるので、保護者や社会に対する説明責任が生じる。この点で、連携協力のしやすい学校があることは非常に重要である。特に春日市とは友好的な連携を保っているので、研究を進めやすい。

- (2) 久留米市と引き続き小学校英語活動について研究を重ねる

久留米市はそもそも授業研究会の一環で関わり始めたが、今回のプロジェクトとも併せて、特に授業の参観を快くさせてもらえているので、今後も特に教授法、授業のやり方、児童の反応という点で授業参観をさせてもらえることになっている。また久留米市はALTとの関わりについては非常に効果を上げている地域でもあり、今後も教員とALTとの関係を観察していきたい。

- (3) 宗像市内の小学校と連携・協力の可能性を探る

学生ボランティアの派遣について最も困難だったのは、春日市への派遣は往復に時間を要するという点であった。春日市からの要請は1日4時間という制限があるにもかかわらず、実際は半日つぶれる形となった。従って午前中ボランティアを行っても5限の授業にギリギリ間に合う（かもしくは遅れる）形しか取れないということであった。この点から、地元の学校と連携をとればもっと多くの学生を派遣することができたかもしれない。今後は宗像市およびその近郊の学校とボランティアの連携をとることが望まれる。

- (4) 春日市との実践研究の成果を 2008 年度中の学会で発表する

プロジェクトの2年目に具体的に研究目標が定まり、研究方法を策定することができた。「小学校英語活動を経験した中学1年生段階での興味・意欲・関心の変化」という題目で調査する。興味・意欲・関心は「スキル中心」でなく「コミュニケーション重視」の英語活動での大きな目標の一つである。実際に調査をするのは来年度2007年となる。1年間をかけての長期にわたる調査であり、意味のある貢献が学界にもできると思われる。

- (5) 教員が参加しやすい研修を立案・実施する

何らかの形で福岡教育大学が実施する研修プログラムを立案し、GP等に応募したいと考えている。現時点で存在する研修ではどちらかといえばスキル中心であり、コミュニケーション重視の活動を想定した研修はあまりない。現在ある研修のもう一つの弱点は、「参加したらそれで終わり」というものであり、研修に参加してもその成果が実際の授業に生かされないものが多い。このプロジェクトの流れで立案する研修では、参加した教員同士が授業を参観したり議論をしたりして、研修を続ける長期型のものを考えている。

(6) 教材作成請負業務の可能性を探る

オン・デマンドで教材を作成する「サークル」タイプの組織を学生で作ることを目指す。特に春日市の小学校からこれこれの教材が欲しい、という要請を受けたら、数名の学生でそれを作り、学校へ持ってゆく、という組織である。学内で教材を作成することで、学生は往復2時間かけて春日市まで出向くことなく、小学校英語の一部を体験することができる。春日市の教師は、教材作成にかかる時間が減るので、その分を必要な業務に回すことができる。

(7) 教科化にむけて、評価の方法を探る

まだ教科になるかどうかは未定であるとはいえ、その可能性が高い。その際に大学として何らかの提言ができるように、またそうなったときの体制を作るためにも評価の方法を探っておくことは得策である。